

# 日本語における不透明表現

— 語彙・表現・文法の諸面にみられる問題点 —

坂 本 元太郎

日本語には、語彙を始めとして表現や文法の諸面にわたって、いわゆる不透明な現象が多く見られ、言語伝達の場合において混乱や誤解を招くことが少なくない。こうした不透明な表現は、日本語に限ったことではなく、どの言語にも見られるもので、たとえばフランス語でも、嘗てはダイレクトな言い回しを避けるのがエレガンスとされたのも事実であった。<sup>(注1)</sup> それにしても日本語の場合には、曖昧な表現や間接的な表現が極めて多く、こうした不透明な表現が日本語の異質性を強調するあまり、結果的にその国際化を妨げている一因となっていることも否定できない。

このことは、日本語それ自体が曖昧であるのか、あるいは日本人のメンタリティーそのものによるものであるのか、改めて問われる必要がある。以下、この点に関して考察をすすめていくが、たしかに日本語そのものに原因がある場合（たとえば構文・文法など）も考えられるが、やはり日本人のメンタルな面や特有な心理に起因するところ

が大きいと推測される。日本語だけの言語現象ではないが、その特色の一つである敬語にしても、<sup>(注2)</sup>文法的・修辭的事実でもあるが、基本的に日本人の心性に根ざしたものと言うことができよう。一般的に言つて、日本人は過度の自己主張をすることもないし、また絶えず相手を意識しながら、それに対応しようとする面を持ち合わせている。それどころか、時にはその意識や配慮が過剰になる場合さえあつて、そういった点で、日本語の不透明性を一層増幅している結果を招いている。「私にはそう思われる」、「ご意見はよくわかるのですが——」、「おことばを返すようですが——」、「こう言つちやおしまいだけど」、「こんなこと言いたくないが」、「なんにもありませんがどうぞ」などの一連の言い回しは、意味それ自体は理解できるにしても、なぜそのような言い回しをするのか、なぜ直叙を避けるのか、なぜ控えめな表現を選ぶのかといったメンタルなところにまで立ち入つて考えると、不透明性は深まるばかりである。表現と真意とのズレが、日本語を理解困難に陥れているのである。

**表現と場面**　日本語の不透明性や曖昧性は、場面（状況）と言語（表現）との非連続性によつてもたらされる。言語は、具体的な場面や文脈と非連続の関係の中では成立することができないという制約は、どの言語にも多かれ少なかれ言えることであるが、日本語はとりわけコトバによる表現（TEXT）の、場面（CONTEXT）からの自立度が低い。つまり、表現を成立させた場面と不可分な関係にある場合が多いのである。表現と場面とは、その自立度や依存度に違いはあつても、一般的には相互に補完しあふことによつて正確な理解が得られるのであるが、とくに日本語においては、その依存度・かわり方が決定的なのである。

比較上のことではあるが、西欧の言語は表現の自立度が高く、場面にそれほど依存しなくても理解できると言われているのに対し、日本語は、表現の自立度が低く、表現が場面にとりこまれて、はじめて理解が容易になることが多い。つまり前者は、表現と場面とが対立関係にあるのに比し、後者はその関係がボケてしまつて融和しているのである。したがつて、具体的な場面に対する理解が欠如すると、表現自体の意味が不鮮明になったり不透明になったりする。それどころか、論理的に矛盾することさえも起こりうるのである。すでに指摘されたことでもあるが、「ぼくはカレーライスだ」<sup>(注3)</sup>とか、「僕の娘は男だ」とかの表現がそれである。ともに断定の助動詞「だ」によつて括られてはいるが、決して「AはBだ」の形式が意味している「 $A \parallel B$ 」という等式で律することはできない。実際にはこうした矛盾が起こってくるわけである。一連のこのような言い方は、省略されたコトバを補つて理解するという手順を踏むよりは、すでに日本語の一つの定型として取り扱われるべき表現であると考えねばならない。この定型表現は、形式的にはともかく、意味内容からは非論理的であるが故に、成立不可能なものなのである。しかし、たとえばこの表現に、「レストランで食事を注文する場面」とか、「娘の出産を話題にしている場面」とかの、具体的なコンテクストを与えてみると、理解が容易となつて、論理的な整合性が保たれるのである。「今日からぼくは夏休みだ」「顔は○○、背中△△だ」(大相撲実況放送)も同じことである。日本語においては、書きことばの場合でも、話しことばの場合でも、理解の正確さを期すためには、「場面」の概念は不可欠なものなのである。

論点が変わるが、場面依存性の高い文学として俳句がある。短詩型文学であるので、表現と場面の高度な関係は、しばしば象徴的な境地にまで達していると考えられる。俳句におけるこうした関係は、表現と場面にとどまることな

く、全体と部分、さらには又、自然と人間といった枠組みで捉えられ、二つの相反、対立するものが作り出す相乗効果や補完関係が、その前提になっているのである。いわゆる「二句一章」の理念がそれである。

荒海や佐渡に横たふ天の川 (芭蕉)

閑かさや岩にしみ入る蟬の声 (芭蕉)

五月雨や或夜ひそかに松の月 (蓼太)

寒月や衆徒の群議過ぎて後 (蕪村)

いずれの古典俳句の場合も、切字によって断切されているが、これは同時に二つの部分(概念)が高次に結合して、一つの世界が再構築されているということなのである。こうした場合、切字によって括られた部分が、強い感動に支えられながらも、同時に句全体の場面や背景を提示しているのである。日本語の場面依存度は、コトバとしての日本語それ自体だけでなく、文学にも当然、顕著に見られる一つの傾向と言えるのである。

**不透明表現とその心理** 人間関係の確立と維持を志向するコトバである敬語は、論理をいくぶん犠牲にして成立するという点で、一種の婉曲的表現であると言ってよい。敬語を使用するかどうかの判断は、言語主体と場面との対応のしかたによって決定される。さらに通常語に対する尊敬語や謙讓語の選択も、あるいは又、同じ尊敬語や謙讓語それぞれのグループから、どのコトバを選択して使用するかということも、言語主体と場面とのかかわり方による。敬語使用の判断が言語主体の主観を基準にしているという点で、客観的であるとは必ずしも言いきれないだけに、不透明

明な部分があることを否めない。

会　うー会われる・お会いになるーお会いする・お目にかかる  
くれるーくださるーいただく・たまわる

聞　くー聞かれる・お聞きになるー拝聴する・お聞きする・承る・うかがう

行　くー行かれる・いらつしやる・お行きになる・お出でになる・お越しになるーまいる・うかがう

来　るー来られる・いらつしやる・お出でになるーまいる

見　るー見られる・ごらんになるー拝見する

言　うー言われる・おっしゃる・お言いになるー申す・申し上げる

す　るーされる・なさるーいたす（いたします）

こうした対応を考えてみても、いわゆる「ラレ」敬語、「シャル」敬語、「オーニナル」敬語において、敬意の軽重の度合などの点が判然としないことも若干あるし、又、尊敬形式の「おーになる」にしても、「お来になる」「おしになる」「お寝になる」「お見になる」「お着になる」などという言い方が實際上成立しないので、文法的・理論的にはともかく、それをめぐって不透明感を拭い去ることはできない。

一方、敬語とは別に、日本語をとり巻く婉曲表現も極めて多彩である。

\*命令表現を避けて、勧誘・勧告・依頼の表現に変える。ーやめよ（やめましょう）・行け（行った方がよい）・書け（書いて下さい）

\*断定的な表現を避けて、推量表現に変える。―彼も出かける（彼も出かけるらしい・彼も出かけるようだ・彼も出かけるみたいだ）

\*文章末に主観的な表現を添える。―「と思う」「と思われる」「と感じられる」「と考えられる」

\*文章末に逆接的な助詞を添える。―「が」「けど」「けれど」「ですが」

\*別のコトバに言い換える。―から（ので）・わかりました（承知しました・畏まりました）・わかりません（わかりかねます）・できません（いたしかねます）・知りません（存じません）・だれ（どなた）・どう（いかが）

以上の婉曲表現にとどまらず、日常的なものにまでその枠を広げてみると、

\*とりあえず・そんなところ・近いうちに・一応・まあまあです・どうも・一度（お出で下さい）・なんとなしに・狭いところですが・なにもありませんが・いつか（行ってみよう）

これらの表現に共通しているのは、日本人的思考に基づいた言い回しであるということである。これが代名詞グループの慣用的な表現になると、その種類も多く、それだけ不透明性もより高くなる。

\*それはそうと（話題を転換する）・それかあらぬか（そうなのか、そうでないのか）・それはそれは（感動―たいへん）・それはそれとして（話題を転換する）・それはともあれ（話題を転換する）・これはこれは（感嘆・驚き）・これはしたり（驚き―おやおや・しまった）・それはさておき（話題を転換する）・これかれ（いろいろ・なにやかや）・かれこれ（つべこべ・ほとんど・およそ）・あれあれ（驚き・呆れたとき）・なにからなまでに（すべて・全部）・なにはともあれ（ほかのことはともかくも）・なにやかや（いろいろ・さまざま）・なにもかも（みんな・

すべて）・なにさま（なんという名の方―皮肉の氣持をこめて用いることが多い）

又、一方では、「考えさしてもらおう」とか「考えときます」のような一連の表現や、「なんなら茶漬でも」（「お茶づけでもいかがか」といった漠然表現も見受けられるが、後者に至っては、言い回しと、その意図・内容が大きくズレたり、場合によっては正反対になることもあったりで、不透明感がより強くなる。相手に対する配慮や気兼ねから明快に言わない、わかりきったことは取り立てて言わないという心理が、このような表現を支えているのであろう。

先に挙げた「ーが」「ーけど」（「けれど」）「ですが」といった、言いさした形で文章を括ることについて、柳父章氏は、「たとえば、『私も行きたいのですが』のように『が』『けれど』『で』『て』などで終わりになる文である。ふつうこれはその後を省略したのだと考えられている。が、そうではない、と私は考える。省略ではなく日本文の一つの定型である。（中略）『私も行きたいのですが』という発言は、その後は『別にもっと大事な用事があるので行けません』かも知れない。が、そうはつきり言うとは、自分も多少つごう悪いが、相手を傷つけるのではないかと配慮する。そこで言わずに呑みこむ。聞いた方も、はつきり問い返さずに、いっしょに呑みこむ<sup>（注4）</sup>。」と論じている。氏はこうした現象を「生活の幅」としてとらえ、よくも悪くも、日本語の一つの事実として受けとめている。言語の構造的なあり方からすれば、日本語でも、それ以外の言語でも、明瞭さや透明さは十分に確保できるはずであるから、こうした曖昧な言い回しには、やはり日本人のメンタリティーが大きく関係していると考えるべきである。自分または自分のサークルに属することは、低く抑えることがマナーにかなう、出来るだけ物ごとを控え目に受けとめることで、調和を保つことが可能になるといった、日本的思考が関与しているのである。

現代語にみられる不透明表現 文章と語彙のレベルで、現代語における曖昧な表現を取り上げてみる。山田稔氏は「日本語との再会」と題した一文で、次のように論じている。

フランスからの帰りに乗ったエアフロート機は満席で乗客のほとんどが日本人であった。たまたま若い女性と隣り合わせになったので、離陸後間もなく「学生さんですか」と話しかけると、「そういうところですよ」という返事がもどって来た。「観光旅行ですか」「まあそんな風な……」そう言葉をにごして黙り込んだので、それ以上言葉をかける気がしなくなった。(中略)ところで、この些細(ささい)な経験で興味ぶかく思えたのは、くだんの女性が返事に用いた言いまわしであった。学生であるのなら、なぜ「ええ、そうです」と明確に肯定せず「そういうところ」とぼかすのか。観光旅行の帰りなら、なぜ「まあそんな風な……」と言葉をにごすのか。「そういうところ」とは一体いかなる学生であるか。こんな風にはフランス語では言わない。日本語とは何とおかしな言葉であろう。

帰国して旬日足らずして、しかし私は右のような「あいまいな表現」に幾度も出くわした。例えばある学生は専門とは何かと訊(たず)ねられると、微笑(あるいは苦笑)をうかべて「一応ネルヴァルです」と答えたものである。<sup>(注5)</sup>山田氏は以上のように述べ、結論として「これがまぎれもない日本語であることを納得した」と述べ、こうした婉曲表現について、「自分でもその種の言い回しを用いてみると急に気楽になるのを覚えた」と言っている。

語彙レベルで考えても、現代語には曖昧というよりは、むしろ非論理的とも言うべきものも多くある。「なんとなくさびしい」「ちょっと洒落た家」「ほぼ確実」などの「なんとなく」「ちょっと」「ほぼ」といった語は、主観性の強



いものであるだけに、その実態や概念がとらえにくい。「ほほ」と同系列の語として、「だいたい」「おおむね」「たぶん」「おそらく」「ほとんど」なども考えられるが、これらのコトバに、「確」または「完」を伴った漢語を組み合わせた表現は、実際にはよく使用されているとはいえ、論理的にも矛盾していて、不安定さは免れない。「だいたい確定する」「おおむね完納した」「ほとんど完成した」などがそれである。したがって、

確実 確定 確信 確認 正確 完璧 完成 完了 完全 完結 完納 完売 完工 完済 などの漢語との組み合わせは注意を要すべきことである。曖昧な語性をもったものとして、これ以外にも「なんだか」「どうも」「まあまあ」などがある。「どうも」に至ってはまさに万能語というべきもので、短くて便利ではあるが、極めて真意がとらえにくい。その時々で状況で、挨拶コトバ（こんにちは・さようなら）、感謝のコトバ（ありがとう）に使用されるかと思えば、一方では、強調や否定を和らげる働きをもったりする（どうもおかしい・どうも賛成しかねます）。「どうも」の語性は、本来、どうしても（どうもよく理解できない）、どこことなく・なんだか（どうも様子が変だ）、全く・まことに・いかにも（どうも困った）のように用いるものであったが、現在では挨拶・感謝・謝罪・感動（やあ、どうも）というように、意味や用法が拡大されるにつれて、曖昧語化してしまった感がある。これと同様なものに「すみません」がある。「澄む」から出た語で、語源から分かるように、「そのようなことをしていただいたら私の心が済まない」というのが原義である。したがって本来は謝罪の意なのである。戦後になって、それが感謝の意に変質して使われるようになったが、現在ではさらに挨拶や打診または呼びかけ（お願いします）などの意味にまで転用されるようになった。

十年ほど前から目立ってきたものに、「〜とか」という言い回しがある。「お茶とかは好きですか？」などと使うのだが、もともとは「お茶（など）は」とあるべきものであるから、「とか」は「など」と言い替えるか、そうでなければ除去しても一向に差し支えないのである。「あしたは雪だとか言っていた」の表現において、「と」は引用、「か」は疑問であるから、疑問の助詞「か」を欠いた、「あしたは雪と言っていた」に比べてみると、曖昧性が増してくるわけだ、こうしたフアジーな点が流行の原因となったのであろう。又、「とか」は下に助詞を伴って「とかは」「とかを」「とかの」「とかで」「とかに」といった表現を作る。「文学とかを勉強している」、「彼はだれとかの娘をもらった」、「札幌とかで仕事をしているらしい」、「親とかに相談してみて」——これに類するものとして「〜の関係」とか「〜の方」というのがある。「食べ物の関係はなにが一番好き?」、同様に「ご挨拶の方をよろしくお願いします」、「デザートの方はいかがでしょうか?」——よく耳にする表現であるが、「関係」や「方」は、むしろない方がすっきりすること考えると、やはり不透明性を意図した言い方なのであろう。又、同様の意図を持っているものとして、文章末に「かんじ」を添える言い方がある。「あの人ちよつとおかしいってかんじ」——そのような印象を受けるといった意味であるのは理解できるが、自分の主張や主観をぼかしてしまう効果のあることも確かである。場合によっては、一種の照れ隠しの心理も見えるが、ともかくそうすることによってフアジー度を高める効果を生む。以前に流行した「おれも一生懸命やってるよ、なんちゃって」と同類である。さらに「とか」と重用されて、「〜のかんじとか」、「〜なんちゃってとか」となると、もはやミステリアスな日本語としか言いようがない。

否定語や否定的ニュアンスを含む語、または強調語を伴った一連の言い回しがある。「なんにもありませんが」、「お

いしくないけど、「自慢じゃないが」、「こんなこと言いたくないが」、「言っちゃ悪いが」、「○○さんではないが」、「そう言うっては語弊があるが」、「こんなこと言っちゃおしまいだけど」、「ここだけの話だが」――。枕詞的に話の冒頭に用いる決まり文句である。これは自分の発言に対する免罪符的な効果を期待したり、日本人固有の、「和」を保とうとする心理のあらわれとみることができよう。集团的ムラ社会の中で、対立を避け事を荒立てまいとする民族性が、こうしたコトバの母胎になったのであろう。

「案外」・「一応」も使用頻度の高い漠然表現である。案外とは「思いのほかに」の意であるが、話し手の主観がその基準になっっているので曖昧である。「試験は案外やさしかった」は、その基準がはっきりしないことに加えて、どの程度「むずかしい」と思っていたのかという、前提がはっきりしないという点で客観性に乏しい。又「一応」とは暫定的・応急的ということであるから、「仮に」とか「とりあえず」とか言うときの表現である。「一応調べてみます」、「一応お会いしましょう」などと言った場合は、「一応」が「今のところ十分ではないが、そのうちにちゃんとする」といったニュアンスを含み持っている。「不十分だが調べてみる」、「とりあえず会ってみる」ということになる。こうしたコトバを多用すると、会話そのものが、いわゆる蒟蒻化してしまつて、話し手の意図や真意がはっきりしなくなる。それにしても「案外」とか「一応」とかの語が多用される背景には、断定的なもの言いを避けたいという話し手の潜在意識や、場合によっては謙遜の気持があるとも考えられる。「大学卒業の自信はあるのでしようね」「はい一応は」――。ともなると肯定的なこととはわかるが「自信はあります」とは明らかに違ったニュアンスを持つことになる。話しことばそのままの非文法的な言い方に、

\*私ね、猫と犬とあとリスを飼っているの。

\*今日は一人きりなので、そっちに遊びに行ってもいい状態なんだけど——。

がある。どちらも不自然な言い回しであるが、前者は「あと」（名詞）を、「そのほかに」の意味に代用して、修飾語的に使用しているからである。一方、後者にしても、「状態」の使い方の問題がある。自分の感情や考えを控え目に伝えているようでもあるが、自分を客観的・傍観者の立場から見ているようなニュアンスを持っているからである。

「部分」・「周辺」などの語も、現在ではかなり一般化して用いられている。「只今ご説明したことで理解できない部分がありましたか」、「中ほどでしたか、少しわかりにくい部分がありました」——。こうした言い回しがわかりにくいのは「部分」という語の使われ方にある。「政治や経済の、そういう周辺のこととは別問題にして——」も同様である。こうした場合は、「部分」をトコロとかコト・テンに置き換えたり、「周辺」の語を取り去れば、むしろ文意が通る。元来、部分とは全体に対するコトバであるから、「全体の一部」というのが原義であるはず。話しことばとしてはほとんど使われなかったと記憶しているが、それが昭和四十年代になって登場するようになって、現在では文章語にも進出してくるなど、完全に市民権を持つに至っている。しかしやはり、文脈に応じて、トコロ・テン・コト・理由・分野などを適宜使い分けることが必要である。「彼女も一応はステキな感じを与える部分をそれなりに持っているよ」と並べてくるとファジー度がより高くなるのは当然であって、早晚こうした文章が日常化することも予想される。

実態や真意の不明な表現に、「当局筋によれば」とか「消息通によると」とか、又は「関係筋では」といったものがある。まさに不透明そのものである。同様に「四月からタクシー料金改正」という新聞の見出しにしても、「改正」と

は値上がりの意味しても、値下げを意味することは絶対にありえないのである。「改正」とは「改める・なおす」という意味であるのに――。又、ジャーナリズム関係の用語である「成り行きが注目される」の言い方も、一つの逃げ口上のようなところがあつて、その意味するものは、「成り行きがどうなるかは不明だ（わからない）」ということではな  
いか、と言いたくもなる。

語の概念や用法が極めて近似した関係にある一群の語がある。「みたいだ（みたいです）」、「らしい」、「ようだ（ようです）」、「ふうだ（ふうです）」がそれで、意味自体が類似していて紛らわしいだけに曖昧性が強くなる。この一群の助動詞に共通する意味は、「〴〵の状態になる」「見かけは〴〵のかたちをしている」ということであるが、それぞれ特有のニュアンスを持っているので、誤用に近い言い方も多く見られる。

**みたいだ（みたいです）** 助動詞で俗語的な語性を持っている。語感として、親しみ、気楽さを持っている語で、その古形は「見た様よう」というコトバであると考えられている。江戸期からのもので、昭和期にはこの古形は消滅した。「猫ねこみたいような犬」「君きみみたいようなまじめな人」（例示）、「彼も来るくるみたいようなこと言いっていた」「彼女は知らないしらないみたい」（不確かな断定）の二つの用法を持つ。最近とくに用法が乱れて、たとえば「やってもだめだめみたいような」「一緒にがんばろうかかみたいような」「そうだったら楽しいたのしいなああみたいような気がして」「これが現実の社会だだみたいようなきびしさはだれでも感じて  
いる」といった使われ方が増えている。こうした例は、接尾語的に使用しているものである。「これが現実の社会だだみたいようなきびしさはだれでも感じて  
いる」の場合「だみたいよう（といった）」に置き換えることもできるし、「そうだったら楽しいたのしいなああみたいような気がして」においても、「だみたいようはない方ががすつきりするし、論理にも影響はない。これは

「不確かな断定」とするよりも、むしろ婉曲の用法と考えるべきである。「三十歳前半までは結婚しなくてもがんばれるみたいな感じで——」にしても、断定しない分だけ、ソフトにぼかしているようなところがある。

ようだ(ようです)・らしい 「ようだ」が話し手の判断を直接表現するのに比し、「らしい」は、対象の状態に重点を置いた話し手の判断を表すと考えられているが、この二語はほとんど同義であるといつてよい。<sup>(注6)</sup>

「らしい」と異なつて、「ようだ」には婉曲の用法がある。「もうみんな寝たようだ」は不確かな断定の例であるが、急に寒くなつてきたようだね。

今日から夏休みが始まります。—そのようですね。

の場合は断定ではなく、ともに話し手の聞き手に対する配慮から、言い回しを婉曲にしたものであるし、又、連用形「ように」も(言い切りの形をとる場合もあるが)婉曲の用法をもっている。

品物には手をふれないようにして下さい。

事故を起こさないように注意して下さい。

どうぞあまりご心配下さいませぬように。

病気が早くよくなりますように。

これらの例は、命令・要求・願望などの意味に(場合によっては、依頼や勧告の意味にも)用いられたものである。ふうだ(ふうです) 「〜の様子だ」の意味で、次の例のように、「ようだ」とほとんど同じ意味に用いる。

「男はたいへん疲れたようだった。」

「男はたいへん疲れたふうだった。」

「どのように暮らしているだろうか。」

「どんなふうにも暮らしているだろうか。」

なお「みたいだ」には本来、婉曲の用法がない。「だめみたいな」の言い方は、本来の用法からズレた結果、婉曲性を持つに至ったものである。

**敬語に見られる婉曲性** 場面の制約を直接受けて成立する敬語にとって、言語主体の、場面の受けとり方や理解のしかたは、敬表現以前の問題として重要なポイントとなる。一様でない場面に対応していくということは、見方を変えると、敬表現としての完成度を高めることを意味する。つまり、いろいろな場面的制約の中でこそ、完成された敬表現が成立することになるということである。場面はさまざまな性格を持っていて、話し手と聞き手、それに第三者を含んだ人間関係であったり、又、周囲の状態や状況とか立場・役割であったりする。その中で最も敬語行動にとつて大きな要因となるのが、具体的な人間関係であることは論を俟たない。言語行動は、ダレがダレにナニかを伝えることであるが、その中で、ダレがダレに伝えるかという人間志向にかかわる面が、敬語行動の重要な要素である。具体的な人間関係に対応して、それにふさわしいコトバや表現に置き換えたり変化させたりする場合に、ことごらの間接化や婉曲化の方法がとられるが、このことが敬意または敬語につながるようになるのである。

敬語は、物ごとをストレートに表現すること、いわゆる「直叙」を回避しようとすることから生まれた言語である。コトバや言い回しを婉曲化したり臍化したりすることは、直接的言い回しと違って、心理的距離を生み、それを保つ

ことが（たとえば「敬して近寄らず」ではないが）敬意につながっていくと考えられる。したがって相手との心理的距離に比例して敬意が高くなるのであって、これが日本語の基本的な個性なのである。

たとえば、「お（ご）になる」は現代の代表的な尊敬語型であるが（歴史的には江戸時代末頃から使われ始め、「お（ご）なさる」型と併用されてきたが、大正時代になって広く一般化したと考えられている）、この形式にしても、「一つの動作や状態に立ち至る」という直叙を回避した言い方が敬表現として成立したもので、さらに言えば、時間的推移に伴った自然性が基本にあつて、それが敬意となつたのである。「冬になる」「木の実がなる」における「なる」は、動詞「生（あ）る」が語源だと言われる。長い時間を経過しながら、無理なくその動作が進行し、その状態が形成されていく。これが基本的な意味であつて、こういうことが根底にあつて、敬意（敬語）に転じていったのである。

「れる」「られる」は、広く用いられる添加形式の敬表現である（歴史的には「る」「らる」の系統に立つもので、受身・可能・自発の意味より遅れて平安時代以降に「尊敬」の意を表すようになった）。この場合も、その動作を、「自然に無理なくそうなる」（自発）と遠回しに表現するところから、尊敬の意味が生まれたのである。つまり、その動作を人為的に捉えるのではなく、それを自発的、自然的に表現することが敬意に転じたので、ここにも日本人の言語意識のあり方がうかがわれる。

上記の「お（ご）になる」や「れる」「られる」の場合とやや異なるが、**代名詞や一部の名詞**についても婉曲・間接化と敬意とは相互に関係が深い。間接化することによって敬意が生ずるという事実である。元来は方角を示した「あなた」を二人称に用いたり、又、場所を示した「おまえ（御前）」を二人称に用いたりするのも、ともに指示代名詞を



人代名詞に転位させ、間接化することによって、敬意に転じているのである。一部の名詞にも同様の現象が見られる。「殿」は、元来は貴人の住む建物であるが、間接的にそこに住む貴人や主君の敬称として用いるのがそれである。又、「様」も同じで、元来は漠然と方角や方向を示す語であった。<sup>(注7)</sup>それが待遇すべき人への敬称として用いられるのも間接化によるものである。「方(かた)」にしても敬語化に至る事情は同じで、元来、方角や方向を示す名詞でありながら、転じて、たとえば「北の方」「春宮の方」などのように、その方角にいる人や、その場所に住んでいる人を間接的に示すようになって、尊敬性をもつに至った。

以上の語は単独で尊敬語となったものであるが、これらの語が重複したり、又「これ・それ・あれ・どれ」よりも敬度の高い「こちら・そちら・あちら・どちら」などの語と複合すると、さらに高い敬語となる。

こちら様 そちら様 あちら様 どちら様 どなた様 あなた様 こちらの方 そちらの方 あちらの方 どちらの方 お方様 殿方 殿様

したがって敬意の高まりにも、一定の系列がみられる(「あの人↓あちら↓あちらの方↓あちら様」・「だれ↓どなた↓どちらの方↓どちら様・どなた様」)。なお、連体詞「この・その・あの」の場合にも代名詞と同じことが言えるので、ここでは取り上げないが、以上述べたように、コトバの間接化や婉曲化は、敬語の成立を考える上で見逃すことのできない現象である。

**代名詞における曖昧性** このことに関しては、一部、「不透明表現とその心理」の中でふれたが、再び考察を加えて

みることにする。日本語の代名詞は、その種類が甚だ多く、とくに人代名詞にそれが著しい。それは日本語が性差をもっていること（男性語・女性語）、人間関係が多様であること、職業・身分によつてコトバが特殊化すること、方言が存在すること、待遇意識による敬語が発達していること、漢語が流入したことなどと関係が深い。その種類が豊富であるということは、繁雑で非能率的であるとも言えるし、又その使用をめぐつて問題も生じ易いのもまた否定できない事実である。

しかし一方、実際面からみると、必ずしもそうとばかり言えない場合がある。それは代名詞のもつ個別化・特定化の作用である。話し手が相手を指す、ある代名詞を使った場合、聞き手は、それがその中の誰に向けられたものであるかがわかるという便利さをもっている。たとえば、ステータス・性・年齢などが異なる人々の集まりの場合に、「あなたはいかが？」「君はどう？」「あんたも行くか？」「おまえはどうする？」というように、話し手が代名詞を選択して使うことによつて、相手が男性か女性か、目上か目下か（地位・年齢）、親しいかそうでないかというようなことのある程度知ることができ、待遇度の異なる代名詞、又は性差をもつ代名詞を選択することによつて、話し手にとつても聞き手にとつても、相互に個別化し特定化できるという事実がある。

ところで代名詞全体が持っている曖昧性とは、そうした便利性と表裏して存在していることを忘れてはならない。人代名詞には以上述べたように、個別化・特定化につながるものもあつたが、いわゆるコソアド系の指示代名詞は、その性質上、指示性はあるが、個性や特定性はなく、その上、具体的な事実性に欠けるといふ、「負の性質」を持っている。指示性のみを持つのであるから、場面への依存度の極めて高いコトバだと言つてよい。つまり、その使用場

面とか、雰囲気や文脈の助けがなくては理解しえないというマイナス点を基本的に含み持っているのである。又、指示代名詞の使用は言語主体の任意性による場合が多く見られるという点で主観的なものである。話し手が「あれ」と認識したとしても、聞き手にとっては「それ」と認識した方が適当な場合もあつたりする。こうしたズレは話しことばばかりではなく、書きことば（文章語）にもしばしば見られることであるが、話し手と受けとる側との心理的距離のズレが大きいという点では曖昧性が高い。そうしたことは、「仲間うちのコトバ」と言われる代名詞の宿命で、人間関係における親疎の度合によつて、その使用量が増減するということと無縁ではない。家族間では、たとえば「あれが終わつたらこれにしよう」とか、「あれはどうなった」「あれはこれが済んでから考えよう」といった会話の成り立つこともあつて、その使用にあつて、親疎の関係が介入するという点でも客観性に欠け不透明性が残る。

使用する側に立つて考えた場合、人代名詞の選択も厄介な面を持っている。それは代名詞が本来もつていた待遇価値に変化があるからである。たとえば、明治時代以前までは、敬度の高かつた「あなた」は、現在では目上に対しては使用できないので、その点ですでに二人称の万能語ではなくなっている。「あなた」は目上に対しては、使用の許容範囲を超えてしまつていたので、結局はその地位を表すコトバか名前を言うかのいずれかに落ち着かざるをえない。ここに人代名詞のもつ制約がある。自称の「わたくし・わたし・ぼく・おれ」などにしても、その使用には微妙な場面差を考慮しなければならぬし、自称と対称との間に、それぞれ待遇的バランスがあることを考えに入れる必要がある。「ぼくーきみ」「わたしーあなた」「おれーおまえ（貴様）」といったバランスの上に乗りながらも、無制限に誰に対してでも使えないという事情もある。子どもが父を「あんた」、社長が自分のことを「てまえども」、上司に対し

て女性社員が「あたい」などとは言えないことを考え合わせると、人代名詞は同じレベルの中でしか成立できないという性格を持っていると言える。

ともかくも代名詞は、仲間内のコトバとしての性格が強いものであるが、その点では連体詞にも相通するものがある。「例の場所」「くだんの人」「その話」などがそれである。代名詞同様に、具体的指示内容がないので、相互に過去の経験からすでに知っている物ごとや、場面的共通理解が前提にならないと、不透明性や不確実性を除くことはできない。

**文末決定性と不透明性** 日本語は構文上SOV型の言語である。したがって、肯定・否定・断定・推量・意思・願望・疑問・命令・禁止・詠嘆など、文章の論理や意味にかかわる重要なことがらが、文末に集中して表れる。その点で日本語は文末決定性をもった言語といえることができる。柴谷方良氏はこのことに関して、「日本語はSOV型の言語だが、世界の言語の約半数の言語はSOV型の言語であり……」と述べ、「世界の約半数の言語が曖昧で不合理な言語であるはずがない。」<sup>(注8)</sup>とし、日本語が、世界の言語に徴するかぎり、決して特異な言語ではないことを強調している。ただ、この型の言語は、論理の決定が文末でされるので、一種のサスペンスを強いる結果になることは否定できない。

\*私は生まれつき体が弱いので、季節を問わず毎朝六時になると、愛犬を連れて、市内の中央を流れている〇〇川のほとりを散歩しません。

実際には、こうした叙述は考えにくいが、しかし文学作品には、一つの効果をもたらす目的で、この手法を用いることも少なくない。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩は、その典型である。

\* 雨ニモマケズ 風ニモマケズ……………サウイフモノニワタシハナリタイ

主語不明のまま詩が展開し、最後に至って「サウイフモノニワタシハナリタイ」と、はじめて論理が決定する。その間の省略した点線箇所は、二十六行二八三字にもほる。平安時代に成った『大和物語』に、「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（二五六段）という古歌がある。以下、この歌をめぐって次のような説話を中学生の頃に読んだ記憶が残っているので紹介したい（記憶が薄れているので正確さは期し難いのはあるが）。中世に信州更級で歌会があったとき、その中に盲目の歌人がいた。彼に番が回って来たとき、声をあげて詠んだのは、「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」——。最後尾の「て」を「で」（濁音）に替えただけであった。有名な古歌であるだけに並み居る歌人達は、一様に不審の念を抱いたが、最後の一字が「で」となるに及んで、どっと感嘆の声を上げたという。ところも同じ、しかも満月がかかっていたのも同じだったのである（不正確な記憶で恐縮であるが）。有名な古歌を引き合いに出しながら、一種のサスペンスと緊張感を持続させ、最後の一字で、盲目である自分の境遇を織り込む、どんでん返しの手法をとったのである。

以上のような言い回しは、不合理であるとは必ずしも言えないが、文全体の意味が文末でしか決定されないということは、やはり透明度に欠けるきらいがある。こうした心理的なユレを少なくするために、文末の論理を予告する表現方法が工夫される必要もある。たとえば文末の表現を規制する「陳述の副詞」——決して・まるで・ちょうど・ぜつ

たい・どうか・あたかも・おそらく・たとえ・どうして・かならずしも、など——を利用するのも一法であろう。

日本語における文末決定性について、もう一つ取り上げられなければならない問題は、その文章の丁寧度が文末に示されることである。これは論理とは関係はないが、文末の役割としては重要なことに違いない。いわゆる常体（ダ体・デアル体）と敬体（デスマス体・デアリマス体・ゴザイマス体）がこれである。

以上、文章全体の論理（意味）決定や丁寧度（文体）の決定が、文末に依存している事実は、日本語の不透明性を助長する一因となっていることは確かである。

**文法面にみられる不透明性** 語彙レベルばかりでなく、日本語の曖昧性や不透明性は、文法レベルにおいても指摘できることである。又このことは、語彙と文法の両域にわたる場合もあるが、以下、考察を加える。

**1 主語の不安定さ** 主語・主格・主題は、それぞれ同一の概念ではないが、一般的には混同されているのが現状である。主語は述語とともに文章の骨格をなすが、極めて不安定なものである。(A)主語の省略——主語を明示しないのは、伝統的に日本語の一つの定型となっている。これは主語が示されなくても、敬語によって類推できるということと無関係ではないにしても、わかりきった場合以外でも思い切った省略が行われる。

\* 若宮はいかに思ほし知るにか、参り絵はむことをのみなむ思し急ぐめれば、（私は）ことわりに悲しう見奉りはべるなどうちうちに思ひ給ふるさまを（あなたは）奏し給へ。  
（『源氏物語』・桐壺）

\* 「（汽車が）国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」  
（『雪国』・川端康成）

\*「(余は) 山路を登りながら、かう考へた。」 (『草枕』・夏目漱石)

日本語における主語は絶対的優位性を持っていないことが理解できる。(B)主語と述語との間に距離がある——伝統的にこの傾向が著しい。

\*僧都あなたより来て、「こなたはあらはにや侍らむ。今日しも端におはしけるかな。この上の聖の方に、源氏の中将のわらはやみまじなひにもし絵ひけるを、ただ今なむ聞きつけはべる。いみじう忍びたまひければ、え知り侍らで、ここに侍りながら御とぶらひにもまうでざりける」とのたまへば、「あないみじや。いとあやしきさまを人や見つらむ」とて簾おろしつ。(『源氏物語』・若紫)

2 述語の省略 「春は曙・夏は夜」(『枕草子』)ではないが、こうした表現も現代では多い。「私はこれ」「ぼくは鰻」——話しことばによく用いられる型である。

3 修飾関係の自由さ 文章中における修飾語の位置がかなり自由であるので、かえって文意がとりにくくなる。

\*むずかしい子の教育(むずかしいのは「子」か「教育」か?)

\*父は悲しげに去り行く息子の姿を見送った(「悲しげ」なのは「父」か「息子」か?)

\*子どもの好きなおばさん(子どもがおばさんを好き・おばさんが子どもを好き?)

\*明日は雨降る天氣に御座なく候(雨が降るのか、降らないのか?)

構文的に両様に受けとれるわけで、「女性の好きな猫」「私は血まみれになって逃げる賊を追う」「新聞記者でもある氏のよき伴侶みどり夫人は」など、どの表現も文意がユレている。

\*電気釜の目盛がはつきりせず使うたびに落ちない色が染めてあつたらと思ひます。

AはA・Bのどちらにかかるのか不明。国語表現のユレとして最も問題になるケースである。書きことばの場合なら読点が有効である。

#### 4 主語と対象語の混同

形式上は主語となっているが、実際には対象語として取り扱うべき場合がある。「水が飲

みたい・亡き母が恋しい・野球が好きだ・降る雨がさびしい」などで、日本語の定型となっている。「降る雨がさびしい」とは、「降る雨を見ていると(私は)さびしく感ずる」という意であるが、この場合の「さびしい」は、話し手(書き手)の主観を表しているとともに、「降る雨」の状況をも表している。要するに、降る雨の状態を「さびしい」と受けとめているわけで、主客混同の用法とでも言うべきものである。対象語が形式上主語に立つのは、意思や願望の文章か、あるいは主観的形容詞を伴った文章の場合に見られる。

5 助動詞「れる・られる」の曖昧さ  
語彙の問題とも重なる面もあるが、可能の意味と尊敬の意味とが紛らわしい。

\*先生あした旅行に行かれますか。

尊敬の意味なら「いらつしゃる」「おいでになる」とすべきである。一般に「動詞+れる(られる)」の型は、明治時代では文章語専用だったが、話しことばではとくにその区別がつきにくい。

「れる」は五段活用の動詞とサ変動詞に付き、それ以外の動詞には「られる」が付くのが原則であるが、最近では原則にとらわれず、「見れる」「着れる」「出れる」「寝れる」などいわゆる「ら抜き」表現が幅をきかせている。これを



追認するかどうかは今は措くとして、「ら抜き」コトバは可能の意にしか用いられないことに着目すれば、語義が紛れない点で、それはそれでよいのではないかと考える。

6 主語と敬語の対応にみられる問題点　これも又、語彙と重なる面をもっているが、日本語の構文にもかかわるものである。

\* (平社員が) 課長コーヒーをいただきましたましよう。

\* (平社員が) 課長コーヒーをお飲みになりませんか。

上位者と行動を共にする場合、右の例のように、謙讓・尊敬いずれの場合も適當ではない。これは日本語の構文自体にもかかわることでもある。主語を分離して、課長には尊敬語を、自分(話し手)には謙讓語を対応させることが必要となる。

7 格助詞「の」における曖昧さ　(A)「の」は連体修飾語を構成するが、形式的には問題はないとしても、意味的・

内容的に極めて無理な場合がある。

\* 君のわからず屋にもほんとうに困ったものだ。

    ビールの冷えたのを急いで持ってきてくれ。

\* 和服に外套の駅長　・手のあかりを横に向けて　・背広の男　・紬の女

(B)「の」はいくつかの格を持つ。○○画伯筆の「ある女性の肖像画」について、「これは誰の絵ですか?」と尋ねた場合、「の」の解し方によって、その答えは変わる。主格なら「○○画伯の絵です」、目的格なら「ある女性の絵です」、

所有格ならば「美術館の絵です」となる。

8 所有を表す場合の問題点 日本語では所有を表す言い方に、「ある」「いる」を用いる。この動詞は「その場所を占める」ということであるから、本来は「存在」の意味であった。「くを所有する」という場合なら、「くを持っている」と言つてよさそうであるが、一般的ではない。「私には両親がある」「恋人がいる」とは言うが、「私は両親を持っている」「私は恋人を持っている」と言わないのである。存在の意のアル・イルを用いて所有を表すのである。

9 語形が同じで語性が異なる場合

(A) ぼくは行かない (助動詞) — あの映画はおもしろくない (形容詞) (B) 向こうから来るのは女らしい (助動詞) — あの子はおとなしくて女らしい (接尾語) (C) 雨が降るそうだ (助動詞・伝聞) — 雨が降りそうだ (助動詞・様態) (D) 町に行きたがる (助動詞) — 子どもがねむたがる (接尾語) (E) 寒いのに薄着でいる (接続助詞) — 寒いのに驚いた (ともに格助詞) — などの文法的性質を異にする以上の例は、助動詞や助詞に多く見られる。また敬語においても語性を異にする場合がある。

\* 接頭語 「お」 (「ご」) お手紙いただきました (尊敬)、お手紙差し上げます (謙讓)、お茶をどうぞ (丁寧)、ほらお猿さんよ (美化)

\* 「お (ご) — になる」

「お行きになる」と「ご馳走になる」とは語性が違う。前者は「接頭語+動詞+助詞+補助動詞」の構成で尊敬語型。後者は通常語で、「ご」 (接頭語) を伴った「ご馳走」の形で相手を高め、「なる」 (動詞) で当方がその状態になることを示す。「お世話になる」も同じ。

10 語形が類似している場合 「お(ご)ーする」と「お(ご)ーになる」の型は、どちらも接頭語「お(ご)」をとる点で紛らわしい。前者は明治の中頃から使われた謙讓語型。それが自分の動作でありながら、「お(ご)」をとるのは、自分(側)の動作であるとともに、その動作が相手にも関係するからである。

11 文法的事実と使用上のズレ 「白いからす」という表現は、意味上成立しないが、文法的には正しい。「白くからす」は文法的にも成立しないが、そうした観点から敬語を捉えてみると、次の諸点が問題となる。

(A) 尊敬語形「お(ご)ーになる」の中間部分には、動詞連用形(または漢語)が入るが、文法的にそうであるとしても、実際の言語使用上は成り立たない場合がある。上一段(お着になる)・下一段(お寝になる)・カ変(お来になる)・サ変(おしになる)の動詞がそれである。したがって「着られる・お召しになる」「お休みになる」「来られる・いらつしやる・おいでになる」「なさる」などと、別な形式の敬表現とする必要が生ずる。

(B) 助動詞「れる・られる」は規則的に動詞未然形に付いて、尊敬語化するが、実際上は「分かる」「できる」やそれ以外の可能動詞には付かない。

(C) 助動詞「れる」「られる」は自発の意味をもつが、曖昧度の高い表現を生む。「私はそう思います」には明確な自己主張があるが、「私にはそう思われます」には、私とい人間が主体的に判断したのではなく、周囲の力によってそう思わせられたといった、消極的で受身的なニュアンスがある。「くと感じられる」「くと考えられる」なども同じである。自発的表現は曖昧性を増幅させる元凶?と言えるが、周囲に対する過剰配慮によるものであることは否定できない。

古典語と婉曲表現 断定的言い回しを避けた、婉曲的な表現は、古典語にも多く見られる。単語レベルで考察してみると、

\*「む」(助動詞)連体形の場合 現代語でも、雨が降り出したのを見て、「雨が降り出したようですね」、時計を見ながら「五時すぎたようです」と言う場合がある。こうした言い回しは相手への配慮に基づくものというよりは、単に言い方を和らげた表現と解される。

思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ。

(『枕草子』)

同じ心ならむ人としめやかに物語りして……。

(『徒然草』)

「む」の基本的用法は未来推量にある。それが体言に接するとき、その体言の内容を推量的に言うことになり、その結果、婉曲(場合によっては仮定)の意味が派生することになった。「思はむ子」は「大切に思っているであろう子」↓「大切に思っているような子」↓「大切に思っている子」と単純化できるが、現代語ならむしろ「思う子」となるべきところである。ともかく、言い方を和らげるのが中古的表現の一つであったのである。「思ふ子」が実在しているのに、それを推量的に表現することによって、現実感を和らげようとしたものと解される。

\*「むず」(助動詞)連体形の場合 「む」と同じく連体形に婉曲の用法がある。

落人のあらむずるをば用意してうち殺せ。

(『平治物語』)

推量から婉曲へのプロセスは「む」の場合と同じである。「むとす」が「むず」になったもので(古事記では「牟登須」と表記されている)、その成立からみて、「くようとする」が本来の意味である。たとえば現代語では、「帰ろう」

と「帰ろうとする」とは明らかに異なる意味となるが、「むとす」の場合は、「す」（サ変動詞）の意味が形式化してしまい、「む」と同義になったのである。

\*めり（助動詞）の場合　主観的推量（「私には……と思われる」、「私には……と見える」）が基本的意味。それから転じて、確定的な事実について断定的に述べることを避け、婉曲に表現する場合に用いられる。

（私は）ただいまは納言に待るめる。

（『宇津保物語』）

榊葉にふる白雪は消えぬめり神の心も今や解くらむ。

（『後拾遺集』）

客観的事実として存在することがらであっても、それを確定的に述べるのは、相手に対して押しつけがましく感じられるのではないかという心理から、自分の主観的な判断として処理するに至ったという事情によるものと思うが、とすれば現在の、過剰配慮がもたらす言い回しと相通するものがある。

\*「らむ」（助動詞）・「けむ」（助動詞）連体形の場合　同じ理由で、連体形に婉曲の用法がある。

あうむいとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。

（『枕草子』）

をのこども火をともして、見れば、昔こはたと言ひけむが孫といふ。

（『更級日記』）

右の例における「らむ」は現在の、「けむ」は過去のことからについて、それぞれ伝聞的に婉曲性をもたせた表現である。

以上、助動詞に限って、婉曲の表現を取り扱ったが、次にそれと違った次元のものとして、古典語をも含めて、語や表現自体における不透明な点について述べてみる。

\*日本語には、古語、現代語を問わず、否定語を伴った場合でも、伴わない場合でも、また品詞を異にする場合でも意味変化を起こさないという現象がある。

古典語―おぼろげ(け)なり〔おぼろげ(け)ならず〕怪(異)し〔怪しからず〕

現代語―感に堪えた〔感に堪えない〕負けきらい〔負けすぎらい〕失礼極まる〔失礼極まりない〕生まれる前

〔生まれない前〕 感極まる〔感極まりない〕

おぼろげの願によりてにやあらむ、風も吹かずよき日出できて漕ぎゆく。 (『土佐日記』)

恨むなよ影見えがたき夕月夜おぼろげならぬ雲間まつ身ぞ (『金葉集』)

けしかるものども住みつきて……。 (『増鏡』)

けしからず腹ぎたなくおはしましけり。 (『枕草子』)

木魂などいふけしからぬ形も……。 (『徒然草』)

打消の助動詞が付いていても、意味が同じであるというのは論理的には矛盾するが、意味上からは、否定というよりは「おぼろげなり」「けし」を実質的に強める働きを持つと考えられる。

現代語の場合も、打消の助動詞が付いた形や形容詞(「極まりない」の場合があつて多様である。又、「せわしい」が「せわしない」ともなるが、これは二つの形容詞が存在していることを意味している。「とんだ」と同義の語に「とんでもない」がある。これは品詞を異にする語で、連体詞と形容詞なのである。しかし一見したところ類似しているので、現象的にはすべて一括して捉えられるおそれがあり、不透明性が高い。現代語における否定を伴った形(「負け

「すぎらい」「生まれない前」「感に堪えない」は、古典語と同じく一種の強調表現なのであろう。

**慣用表現における不透明性**　慣用句や慣用表現は、幾つかの単語がまとまって、一つの単語相当の独得の意味を表すものをいう。したがって慣用表現は、成立時からすでに不透明性の高いものであったといふべきである。慣用表現は連語ではあるが、意味の上からそれと区別できる場合が多い。たとえば、「手を入れる」は、水中に手を入れる動作である場合は連語であるが、文章に加筆し推敲する意味の場合は慣用句である。が、すべて明快に割りきれるとは限らないので、その点で連語と慣用句とは連続性をもっているとと言える。以上のことを前提にして考察を加えてみる。一般的には「不透明性」は、ものごとを直叙しないことや、あいまいな言い回しから生まれる。「どうしてそんなに時間がかかったの？」において、「時間がかかる」は連語として扱ってよいが、「遅れる」とか「遅くなる」の意味のときは慣用句となる。

この仕事は時間をかけてして下さい。  
時間をかけないで料理するのが基本です。

と使うと、「急がずにゆっくりと」、「急いで早く」の意にそれぞれ用いているので、直叙を避けた間接的な表現となる。したがってその分だけ婉曲度が高くなるわけである。「お耳に入れる」にしても、相手の耳に物を入れることではなく、「内々に知らせる」意味で、相手を高めて「お耳」と言ったのである。全体として「お知らせする」意の謙讓の慣用句である。前述したように慣用表現は、その構成語とは関係がなく、それぞれの語に還元できるものではないか

ら、その事情が理解されていないと極めて曖昧なものになってくる。慣用表現は日本語の場合、膨大な量にのぼる。(A)固有の文化・生活を背景にしたもの、(B)比喩的表現によるもの、(C)身体の一部や動物などの特性を利用したものなど一様ではない。<sup>(註10)</sup>

次に身体に係する慣用句のうち、透明度の低いと思うものを挙げてみる。

- \*目がない 目が肥える 目がすわる 目が高い 目をかける 目が散る 目が届く 目がとび出る 目がものを言う 目から鼻に抜ける 目から火が出る 目と鼻の間 目に余る 目を回す お目にかかる お目にかける 目をむく 目を光らす 目を三角にする 目を丸くする 目の黒いうち 目の上のたんこぶ 目の色を変える 目にものを言わす 目に障る 目にかける 目に浮かぶ 目が利く 目にとまる 目を落とす
- \*鼻にかける 鼻であしらう 鼻があぐらをかく 鼻が高い 鼻を折る 鼻を曲げる 鼻の下が干上がる 鼻の下が長い 鼻につく 鼻をつく 鼻を明かす 鼻の先 鼻を高くする 鼻もひっかけない
- \*耳をふさぐ(おおう) 耳を揃える 耳を敬てる 耳を澄ます 耳を傾ける 耳を貸す 耳に挟む 耳が痛い 耳にさわる 耳に逆らう 耳にこたえる 耳にとまる 耳に入れる 耳が早い 耳が遠い 耳が肥える 耳にする
- \*手が上がる 手を借りる 手が切れる 手がかかる 手が回る 手を加える 手を貸す 手をかえる 手をうつ手を尽くす 手を入れる 手を合わせる 手に乗る 手に余る 手に汗を握る 手が後ろに回る 手がふさがる 手が離れる 手が届く 手が出ない 手がつけれない 手を煩わす 手を焼く 手を見せない 手を回す 手を広げる 手を抜く 手をつける 手を束ねる 手を出す 手を染める 手を袖にする 手に入れる 手に掛け



る 手が無い 手の裏を返す 手をのばす 手を汚す

\*胸をふくらませる 胸を撫でおろす 胸をおどらせる 胸をうつ 胸を痛める 胸が塞がる 胸に畳む 胸にこたえる 胸におさめる 胸にあたる 胸が潰れる 胸が騒ぐ 胸が焼ける 胸がすく 胸がとどろく 胸を借りる 胸を突く 胸に手を当てる

\*腹が黒い 腹を割る 腹を肥やす 腹を合わせる 腹を抱える 腹を探る 腹が大きい 腹が太い 腹がない 腹が立つ 腹を見せる 腹を据える

\*口を出す 口に出す 口をとがらす 口を切る 口を合わせる 口も八丁手も八丁 口にまかせる 口にのせる 口が悪い 口が滑べる 口が酸っぱくなる 口から先に生まれる 口が過ぎる 口が固い 口を利く 口が重い 口が軽い 口がうまい 口が回る 口を割る 口を揃える 口を開く 口を閉じる 口が干上がる 口が減らない 口にする 口数が多い

\*首にする 首を切る 首を突っこむ 首を長くする 首が回らない 首を振る 首をひねる 首が飛ぶ 首をかしげる

\*腕が鳴る 腕が上がる 腕を振るう 腕に磨きをかける

\*舌を出す 舌が回る 舌を巻く

\*頭が痛い 頭を抱える 頭をはねる 頭が低い 頭を丸める 頭が上がらない 頭が下がる

\*尻を持ち込む 尻を据える 尻に火がつく 尻に敷く 尻が重い 尻が軽い 尻を叩く 尻が長い

\*肩を持つ 肩を並べる 肩を落とす 肩で息をする 肩を入れる

\*足がつく 足が出る 足を洗う 足を引っ張る 足が乱れる 足を取られる 足を棒にする

\*腰が軽い 腰が強い 腰が低い 腰を折る 腰を抜かす 腰を据える 腰を入れる

右以外にも、歯が浮く 歯の根が合わない へそを曲げる へそで茶を沸かす 背を向ける あごを出す あごで使う あごが干上がる あごが落ちる あごを外す すねをかじる すねに傷をもつ 喉が鳴る 喉から手が出る、などがあり、体に関するもの以外にも、お茶を濁す 匙を投げる 鎚を削る 棒に振る 筆が立つ 柵に上げる 道草を食う 味噌をつける 胡麻をする 筆を入れる 出る所へ出る、また動物関係でも、雀の涙 鶴の一声 猫をかぶる 狐につままれる 犬も食わぬ 馬が合う、などその種類が多い。拡大解釈するまでもなく、このような事情もまた日本語の透明度を妨げる一因となっている。

**日本語における不透明表現の成立理由** 婉曲的なものは曖昧さに通ずるが、曖昧な表現をする心理については、見方によって評価が分かれる。肯定的に言えば、それは人間関係における優しさや気くばりがあるからとも言えるが、否定的に見れば、気の弱さと甘えがあるからとも言える。曖昧さには、こうした二つの心理が同居している。そのいづれにしても、その程度が問題であるが、周囲に対するいわゆる過剰配慮がもたらす曖昧な表現は、敬語に徴するまでもなく、日本語の基本的性格の一つであることは否定できない。日本語は、英語などの言語に見られる、論理を強く前面に押し出すいわゆる「確認する言語」とは違って、「察する言語」の性格が強い。それだけ、いくぶん論理を控

え目にしなければ成り立たない面を持つことにもなる。

一方、日本人は、現実の生活の場で、調和と求心力をベースとし、全体の中に個を没し、相手を気遣い人の心を傷つけまいとする。日本人のそうした生き方や精神性が、日本語特有のデリケートな言い方や婉曲的な言い回しを生むに至ったのである。その点で、日本語は言語的に処女性を持つと言えようか。曖昧な言い方は、真意がとらえにくく、さらには真意と表現との間に、かなりのギャップが見られる場合もあつたりする。しかしそれは人間関係を確立し維持するための、社交的で儀礼的な言い回しなのであるから、善か悪かの二者択一の論理で律しきれものではない。

日本人のメンタリティーを総括するものとして、奥山益郎氏は、夏目漱石の『草枕』の冒頭の一文を紹介している。山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

これについて、奥山氏は、「漱石は人の世の住みにくさとして、三つの例を挙げたわけだが、一番目の『角が立つ』……中略……とは、人と人とのつきあいが丸く納まらないことだろう。『角』というのは、『心の角』であつて、お互いに『角』が鋭いとうまくいくはずがない。敬語というのは、いろいろの表現法があるけれども、結局は『角を立たせない』手段とっていいだろう」

(「角が立つ言葉」・『日本人と敬語』東京堂出版)  
理屈や論理だけを優先させて、これにこだわり過ぎると、人間関係がスムーズにいかなくなるが多いことを言うたものであるが、婉曲な表現や敬語は、そうなることを回避する一つのクッションや安全弁の役割を果たしているのである。芭蕉が、「言ひおほせてなにかある。」(「先師評」・『去来抄』)と喝破したことにも、又「言つてしまつたらお

しまいだ。」というセリフにも、その辺の微妙な息づかいを見てとることができる。

私達の日常生活でも、話の本論にいきなり入らないで、社交的な会話から始めたり、また手紙の伝統的な型として、時候の挨拶などの前文を、主文に先立ってもってきたりするが、これも又、人間関係をスムーズにするための一つの方法として定着したもので、コミュニケーションの際の重要な型と言える。

婉曲表現が日本語の一つの個性になったことについて、どんな理由が考えられるであろうか。その理由は単純なものではないし、いろいろと複合した条件が考え合わせられるが、いくつかの視点から考察してみる。

**\*地理的・社会的視点**　日本は四方海に囲まれた島国で国土は狭隘。そうした地理的状況の中での長年にわたる生活は、海を行き止まりの壁と意識せざるをえなかった。その壁の内側で生活することによって、ムラ社会的な同質社会を築き上げてきた。有史以前から日本人は、島国的メンタリティーのもとに、民族としての同一性(アイデンティティ)を頑固なまでに保持し続けながら、今日に至っているのである。したがったものの考え方も均一化され、複眼的思考や対立的行動が、基本的に出きにくくなっているという面を持っている。そうした狭く閉ざされた国土でありながら、社会的には人口過剰、その上、単一言語、単一国家であるという特殊事情が加わる。小さな空間に、たくさんの人間が住むことになる。些細な行動でも思わぬ影響を他に及ぼしかねない場合もあって、そうしたところから、論理を前面に押し出して対立することを控える傾向が出てくる。なお又、少数民族の存在は否定できない事実ではあるが、ほぼ同じ民族が単一言語を使用している現実<sup>(注1)</sup>は、世界的にみても極めて異例のことで、そういう諸要素が複雑に絡みあって、「以心伝心」とか「言わぬが花」といった、論理よりも倫理を優先させるという日本人の心情が形成さ

れてきたのである。このことを言語表現の面からみると、日本人はナニを言うかということよりも、ドウ言うかという点に細心になる民族であるということもできる。

**\*日常生活に即した視点**　日本独自とは言えないまでも、日本人の生活様式を象徴するものに「襖の文化」がある。これはしばしば西欧諸国の「壁の文化」と対比されるが、「襖」は木と紙を素材として造られ、状況に応じて広狭自在に活用できる便利性を持ち合わせてはいるが、独立性や密閉性に欠けるので、ある程度、他に対する心配りや気がねがないと生活できない。一方、石や壁による空間は、個人の独立性は保てるが、そうであるが故に、他を意識する必要も、それほどなくなるし、自己中心的な生活を営むことが可能となる。いわゆる「雑居文化」と「個室文化」の違いで、こうした日常生活様式の影響も看過できないことの一つである。

**\*日本人の言語観の影響**　ソフトで間接的表現をするのは、言語をどう考えているかという、日本人の言語観によるところも多い。日本人が古来もっていた言霊信仰が、これを知る上で深くかかわってくる。『万葉集』巻五・山上憶良の歌

神代より言ひ伝て来らく　そらみつ倭の国は皇神の厳しき国　言霊の幸はふ国と語り継ぎ言ひ継がひけり（神代  
欲理　云伝久良久　虚見通　倭国者　皇神能　伊都久志吉国　言霊能　佐吉播布国等　加多利継　伊比都賀比計  
理）

日本は、「言霊の幸はふ国」だと言うのである。これは、「わが日本の国は、ことばのすぐれた霊力が、活発に発動する国だ」との意である。言霊とは「言魂」のことで、言葉自体に内在している不思議な霊力のことである。これは、

「コトバは単なるコトバにとどまるものではなく、それは靈力を持っている。だからコトバを口に出すと、その不思議な靈力によって、その内容が具体的なことがらとして現実化する」という考えに基づく信仰である。善いコトバや祝福のコトバは、よい結果や祝福されるべき事実を、悪いコトバや不吉なコトバは、よくない結果や好ましくない事実を招来するということになる、当然コトバの取捨選択が必要となってくる。日本語の敬語も、根源的にはこうした考えの延長線上に位置する言語的事実と考えてよい。又、

葦原の瑞穂の国は神ながら言挙げせぬ国　（葦原　水穂国者　神在隨　事挙不為国）——柿本人麻呂・『万葉集』卷十三—この歌は、「日本という国は、すべてを神まかせにしておいて、口に出して言ったり祈ったりなどしない国だ」という意味である。このような二つの歌から理解できるように、日本人が持つ言語観によって、コトバの選択作用が行われたり、論理を前面に出すことを避けるようになったりして、その結果、日本的言い回しが出来上がっていったと考えることもできる。

以上述べてきたこととの関わりの中で、最も重要で根本的な要因は、日本が農耕を中心とした社会であったこと、したがって日本人は農耕民族として生きてきたことである。このことは、たとえば、肥沃な土地に恵まれず、狩猟民族として生きていかざるをえなかった西欧諸国との決定的な違いなのである。

農耕社会の原点は、土地と太陽と水とに集約される。狹隘ではあるが豊かな土地と、水量に恵まれた日本ではあるが、西欧社会の狩猟による獲物とは違い、それらは個人の所有として独占できるものでなかった。土地と水はムラ全体の共有であったのである。日本人は長年にわたって、ムラという生活単位を離れることなく農耕をし続けてきた。

こういう社会では、人々（個）とムラ（全）との関係は、運命共同体的と言ってもよいもので、全に個を埋没させることによってしか、個を全うすることができなかつた。そしてこの場合の、ムラ（全）を律する原理が「和」にほかならなかつたのである。

これは西欧社会が、対立と対決による人間関係を基盤に形成されていったのとは全く異なる。対決は相互不信を生み、争いが繰り返され、それを解決する規範を法律に見出すことになる。したがって西欧社会を律する原理は「法」であり、それに基づく契約思想にある。個と個との対決が人間関係の根底にあるから、彼等は個を全に優先させ、個を主張する。主張すること自体が、逆説的な意味で、しばしば人間関係を維持し確立するための代償行為であるとの感を強く抱かせる場合が多く見られる。そうだからといって西欧の人々が、和を嫌っているのではもちろんない。和の必要なことは十分に自覚している。それはしかし、日本人が和そのものを至善としている点で異質なものがある。

「和」は、呉音で「ワ」、漢音が「カ」である。「禾」（カ）が音を表し、加えるという意の「加」が語源となっている。したがって、人が発する声にに応じて、それに合わせるということが原義で、そこから「心を合わせてやわらぐ」の意となったものである。漢字の成立事情から理解できるように、「和」はその精神として、力を合わせることに、やわらかさ、角がないこと、あたたかさなどと同じものである。「以和為貴」（和を以て貴しと為す）（聖徳太子・「憲法十七条」）とあるように、日本人は、対決とは比較的無縁なものであつた。理ではなく情の次元のものであつたところに「和」の心を見ることができる。

日本の農耕社会を支配する原理が「和」であつたが、そこから家族主義的傾向が生み出される。血族集団、情緒集

団である家族は、コトバを最少限に用いても十分に解り合えるが、それと似たようなことが民族レベルでも言えるのである。フランスでは「明解でないものはフランス語ではない」と言われるが、婉曲な表現や遠回しな言い方をするのが、日本語の抜きがたい個性なのである。敬語の体系的な発達は、日本語の最大の特徴であるが、これにしても、ムラ社会の共同原理である「和」とは、決して無縁なものではないのである。

以上

注1 「たとえば、『ほかにしてさし上げることとは?』とホテルでボーイに問われたら、『チップの催促』と推察すべきなのだ。(中略)ところが最近のパリは、えん曲な言い回しに代わって「直接法」がふえた。」(「素顔のパリ」毎日新聞・一九八一年十一月十二日)

注2 現在、敬語を有している言語は、日本語以外にも幾つか確認されている。しかし世界の諸言語について、その調査が十分になされていないので、今後に俟つべきものがある。敬語の実態は現在のところ次のように考えられている。

	日本語	朝鮮語	ジャワ語	ベトナム語	チベット語	モンゴル語	ヒンディ語	チェコ語	英語他
尊敬語	○	○	○	○	○	○	○	△	(△)
謙讓語	○	○	○	○	○	○	△	×	×
丁寧語	○	○	○	○	○	×	×	×	×

(『日本語教育事典』・日本語教育学会編・大修館書店・二二八ページ)

注3 「ぼくはカレーライスだ」という表現は、すでに日本語の一つの定型として認められるもので、「ぼくはカレーライスを食べる」



という文章の、「くを食べる」が「だ」によって代用されたものと見ることが出来る。あるいは又、「ぼくの食べるのはカレーライスだ」とも考えられるので、「ぼく」という主体の行為の及ぼす対象物を含んだ表現であるとも見られる。

注4 「『ですが……』の世界」(毎日新聞・一九八五年二月十五日)

注5 読売新聞・一九七九年八月二十二日・夕刊

注6 「雨が降るようだ」「雨が降るらしい」を比較してみると、「らしい」の方は単なる話し手の主観の表現ではなく、その状態に重点を置いた話し手の主観であると考えることが出来る。

注7 たとえば「横様」(ヨコザマ)の語にそれが残っている。なお「様」が敬称となったのは室町時代あたりからである。また「殿」は平安時代には高い敬意を持つていたが、室町時代になると「様」よりも低い敬称に変化したようである。

注8 「日本語は特異な言語か?」『月刊言語』一九八一年十二月

注9 山崎良幸氏は、「もしそうだとすれば、『と』の脱落によって『す』が鼻音『む』に同化され、有声化して『ず』となったと解することが出来ます。」(『古典語の文法』・武蔵野書院)と論じている。

注10 (A)「油を売る」は、むだ話などをして仕事を怠けることであるが、昔、店で油を売るときに、升などから油が滴り落ちる間、客と話をしているのが、あたかも仕事を怠けているように見えたことに由来する。又「耳を揃える」は、昔、大判や小判などのふちをそろえたことに由来している。

(B) ペンを折る 筆が立つ 筆を加える など

(C) 腹を割る 肩を持つ 舌を巻く 歯が浮く など

猫をかぶる 犬も食わぬ 馬が合う など

注11 世界の言語数は、三、〇〇〇とも三、五〇〇とも言われる。一九七一年の調査では、インドで使用されている言語は七二三、方言を加えると一、五四三となっている。まさに典型的多言語国家である。現在、注目を集めているユーゴスラビアは、人種のモザイクと言われ、小国ながら言語数は四である。又、パプア・ニューギニアに至っては、日本の一・二五倍の国土に、七二〇もの細分化された言語があり、超多言語国家の観を呈している。